

ベルニーニ作《キリストの血》  
——磔刑と「血の海」についての一考察——

荒木 智子 (東京藝術大学)

ローマ・バロック様式の立役者、彫刻家ジャン・ロレンツォ・ベルニーニ (1598-1680) は、晩年に《キリストの血》(1670年頃、テイラーズ美術館所蔵) と呼ばれる1枚の素描を残した。生涯を通して数多くの宗教作品の制作に身を捧げてきた彼は、自身の死を目前に控え、救世主キリストに取材した2つの作品として、本素描とキリストの胸像を制作した。これらは個人的目的のために制作された数少ない作品で、老大家の晩年の信仰を窺い知ることができる点で非常に重要である。

素描《キリストの血》は、浮遊する磔刑のキリストから滔々と噴き出す血が、画面下部に茫洋とした血の海を形成するという、特異な表現で描かれている。のちにフランソワ・スピエールによって版画化されて流布し、絵画に翻案された作品も数点現存する。この素描に関する主要な先行研究は、エルヴィン・パノフスキーとアーヴィン・レイヴィンによるもので、前者はこの素描の図像を「神秘の搾り桶」や「生命の泉」の流れをくむ聖体論的図像として位置付けた。その後レイヴィンは、ベルニーニが自らの「良き死」を準備するという制作の動機に注目し、「メメント・モリ」の系譜との関連を論じている。(LAVIN, 1972) 本発表はこれらの先行研究に依拠しつつ、十字架の下でキリストの血を受ける女性像と、茫洋と広がる「血の海」という独特なモチーフについて、ベルニーニの表現意図をさらに明らかにすることを試みるものである。

キリストの血を受ける女性像が誰であるかは過去に議論の的となったが、現在では聖母マリアに同定する見解が優勢である。本発表ではさらに、この女性像が教会の擬人像(マリア=エクレシア)でもあることを、寓意的要素を含んだ磔刑図像の作例との比較を通じて考察したい。同時に、ミケランジェロによって晩年に描かれた一連の磔刑図とそのヴァリエーションとの比較考察を試みる。

本素描は恐らく、磔刑図像と「血の海」の幻視を組み合わせた構図の最初の例と考えられる。キリストの血による贖罪と救済を広大な海として表現した作者の意図は、救済の無限大の「普遍性」を想起させることであっただろう。「コロサイの信徒への手紙」1章のパウロの言葉に見るように、キリストの犠牲によって神と人間との関係が回復され、全被造世界に平和と和解がもたらされるという福音は、「世界中至るところの人々」に伝えられるのである。そうしたキリストの血の恩恵の普遍性(universalità)と、当時のカトリック教会が迎えていた海を越えたグローバルな宣教の拡大の動勢(globalità)とが時代的に符合する点は、「血の海」のモチーフを説明するひとつの端緒となるのではなかろうか。